「私は『おもてなし親善大使』」

職員室前の廊下を歩いていた中学二年生の七恵の目に「おもてなし親善大使 育成塾 塾生募集」の言葉が飛び込んできた。大きなポスターにはこのように説明が書かれていた。

「おもてなし親善大使」とは？

二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピックをひかえ、東京には、今後ますます海外からの旅行者が増えることが予想されます。海外からの旅行者に東京の魅力を伝え、「おもてなし」できる知識や経験を身につけるための育成塾を、昨年に引き続き、この夏も開催いたします。外国人旅行者に、東京に来てよかったと思ってもらえるような「おもてなし」をする、それが「おもてなし親善大使」です。

応募資格は、「英検三級以上の合格者またはそれに準ずる英語力を有する者」ということだった。

七恵は、英検を受験したことはなかったが、英語の勉強は大好きだし、英語力にはある程度自信があった。何より、二〇二〇年のオリンピック・パラリンピック開催に自分が何かしら関わりたい、そして、外国人旅行者に「おもてなし」をしたいと思い、同じクラスの友達の由美と一緒に応募した。

抽選の結果、七恵は、「おもてなし親善大使 育成塾」の塾生となることができた。

由美も、抽選に通っていた。七恵は、それを聞き安心した反面、自分の英語力が不安になってきた。由美は既に英検準二級に合格していたからだ。

（由美に比べて、わたしは……。）

◆

いよいよ研修が始まった。中学生と高校生が、二日間の日程で研修を受ける。

研修一日め。朝から夕方まで、さまざまな講義があった。しかし、七恵にとって、それらの講義は、新鮮な驚きに満ちた内容ばかりで、疲れを全く感じさせなかった。

その日、一番驚いたことは講師の先生が話してくれた異文化の話だった。どの国の人に対しても同じ人間として、相手を大切に思って接することが一番大事なのだということは分かっていたが、国や文化による生活習慣などの違いは想像以上だった。例えば、日本人は子供を褒める時などに頭をなでるが、タイの人にとっては、人の頭は神聖なものであることから、嫌がる人が多いということ。他にも、ピースサインや親指を立てるグーサイン、親指と人差し指で輪をつくるOKサインをしてはいけない国があることも知った。

日本ではあたりまえのことだからと、全く悪意もなくしたことが、結果として、相手に不快感を与えたり、侮辱されたととらえられたりしてしまったら大変なことになる。

◆

オリンピック・パラリンピックについての講義もあった。

「初めてボランティアが採用されたのは、一九四八年に開催されたロンドン大会です。二〇一二年のロンドン大会では、オリンピック・パラリンピック組織委員会が採用した七万人のボランティアが活躍しました。また、それとは別に、ロンドン市が採用した観光ボランティア『チーム・ロンドン・アンバサダー』も活躍しました。」

「東京で開催される二〇二〇年大会には、世界中から多くの、さまざまな人が訪れます。そうした、海外の人々の滞在中の不安を取り除き、東京を楽しんでもらう、そして、満足してもらうためには、ボランティアの協力が欠かせません。……」

その講義を聞いた七恵は、二〇二〇年大会で、ボランティアとして思いきり活躍したいと思った。

午後の英会話の研修が終わり、最後におもてなし親善大使育成塾のスタッフの方の挨拶があった。

「さまざまな国の人々が日本を訪れます。日本についての知識が全くない人や、日本とあまり交流がない国の人も来ます。それぞれの国に、それぞれの国や民族独自の文化や習慣、宗教などがあり、どの国の人々も、それに誇りをもっています。皆さんも、日本に誇りをもつと同時に他の国を尊重する姿勢を忘れないでください。日本

ではあたりまえのことでも、他の国ではあたりまえではないことがあります。たくさん学んでください。ただし、知識があればいいというわけではありません。『おもてなし』をする心構えが大切です。皆さん一人一人がよく考えてください。」

◆

研修の二日めこの日は、観光体験学習ツアーだ。都庁で外国の人の案内をしている観光ボランティアの方から、実際の案内の仕方などを学び、その後は、バスで浅草に向かう。

ちょうど、お昼ご飯を食べ終わって休んでいた時、困った様子の外国の人が近づいてきた。

七恵は勇気を出して、

「何かお困りですか。」

と英語で尋ねたところ、

「日本で有名な〝すき焼き〟を食べたいと思っているのだけれど、〝すき焼き〟とはどのような料理なのですか？〝カワイイ〟ものはどこで買えますか？　それと、……」

と、次々に質問を受けた。七恵は英語力以前に、どうやって説明したらいいかが分からなくなり、ぼう然としてしまった。

すると、由美が一緒に応対してくれた。

「すき焼き？　イエス。」

由美は、紙にすき焼きの材料の絵を描き始めた。

（英語を使うんじゃないんだ……。）

七恵は驚いた。由美はその後、英語で説明を始めたが、卵をつけて食べるということが分からないようだった。七恵は英語交じりの日本語で食べ方のジェスチャーを始めた。すると、

「オーケー！」

と言って理解してくれた。七恵はとてもうれしかった。

七恵と由美が、午後の研修を楽しみにしながら、講座のテキストを読んでいた時、近くにいた中学生が、一日めの研修の内容を振り返りながら話し始めた。

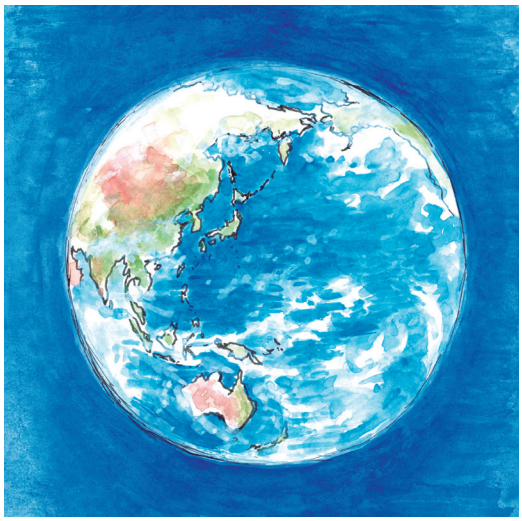
「日本ではあたりまえに食べているものでも、文化や習慣から食べられない人がいるんだね。」

「本当にいろんな人がいてびっくり。でも、そんなにたくさん覚えていられないし、目の前にいる外国の人がどういう人かってなかなか分からないし、どうすればいいんだろう。」

七恵は由美と目が合った。きっと由美も自分と同じことを考えているのだろうと思った。

二日めの午後の研修が終わった。七恵は由美と二人でおもてなし親善大使の事務局のスタッフに挨拶に行った。

「私たち、二〇二〇年までの間にたくさん準備をして、『おもてなし親善大使』として広く世界に目を向けていきます。どういう気持ちで『おもてなし』をすればよいか、少し分かった気がします。ありがとうございました。」

七恵と由美は目を合わせ、にっこりとほほえんだ。

（三浦　摩利　作）